

け、積極的に動きだした。

八月のカサブランカにおけるアラブ首脳会議以降、アラブ各國関係の修復は、特別委員会の設置後、徐々に実現に移されてきた。この仕掛け人は、サウジアラビアであり、また不参加を表明したシリアの力であった。サウジアラビアは、アブドラ皇子を特別委員会に参加させ、分解しつつあるアラブ諸国の再統一に向

1、サウジの調停努力——カサブランカサミット以降

サウジアラビアは、キャンプ・デービッド路線に合流する“和平”イスラエルとの直接交渉が成功することを望んでいた訳ではない。

ニシアチブとアラブの反帝団結を基礎とする包括的和平ニシアチブの

二つの路線の分解の中で、自己の立場を問われてきた。サウジアラビア側へ何の妥協もしなかった。“和平”

王制は、最も反動的な国家であるが、イニシアチブの展望が頓座してしまった結果、サウジアラビアは、親帝

4人の米人質からレバノンへの公開状(資料⑧)…

新しい型の攻撃にさらされて、イスラエル人縮み上る(資料⑨)…

第6回GCC(ガルフ協力評議会)サミット(資料⑩)…

激動の中東ドキュメント 1985年11月11日～12月6日 …

マソヒスティックな政治的原理

分裂は、王制自身の内部の宗教的原理

シリアの力と一体に結びついている。

そしてシリアは、レバノン安定のための努力を続けている。アラブの分裂は、王制自身の内部の宗教的原理

シリアはレバノンのどんな党派に対してもいかなる事も強制するつもりはない(資料①)…

アマル—PSP戦闘について(資料②)…

PFLP政治局声明(資料③)…

“アルハダフ”(85.11.18日号)論説の要約(資料④)…

1985年——武装闘争高揚の年(資料⑤)…

セセイン国王のメッセージ(資料⑥)…

12月11日シリア・ヨルダン共同声明(資料⑦)…

4人の米人質からレバノンへの公開状(資料⑧)…

新しい型の攻撃にさらされて、イスラエル人縮み上る(資料⑨)…

第6回GCC(ガルフ協力評議会)サミット(資料⑩)…

激動の中東ドキュメント 1985年11月11日～12月6日 …

シリアの指導力による中東和平の現局面

一九八五年二月一〇日

目次



第7号

発行 ウニタ書舗
東京都千代田区神田神保町1-52
TEL. (03) 291-5533
編集 J.R.A.
郵便振替 東京1-48443
三菱銀行神保町支店 当座9012656
会員制 年会費20000円

シリアの指導力による中東和平の現局面…

シリアはレバノンのどんな党派に対してもいかなる事も強制するつもりはない(資料①)…

アマル—PSP戦闘について(資料②)…

PFLP政治局声明(資料③)…

“アルハダフ”(85.11.18日号)論説の要約(資料④)…

1985年——武装闘争高揚の年(資料⑤)…

セセイン国王のメッセージ(資料⑥)…

12月11日シリア・ヨルダン共同声明(資料⑦)…

4人の米人質からレバノンへの公開状(資料⑧)…

新しい型の攻撃にさらされて、イスラエル人縮み上る(資料⑨)…

第6回GCC(ガルフ協力評議会)サミット(資料⑩)…

激動の中東ドキュメント 1985年11月11日～12月6日 …

く、政治路線上の問題としてあり、その限りではアラファート派が政治路線を修正すれば、関係を回復してもよいという立場にある。ヨルダンはアンマン合意の推進が帝国主義勢力とイスラエルに阻まれ、その打開の道を米帝に対するさらなる交渉とシリアルとの和解という二面政策として追求している。ヨルダン、シリアル両国とも、関係改善は、経済的意義と政治的安定の意義が大きいが、両国とも戦術的色合が強い。エジプトにおいては、米帝に対する経済的従属構造から抜けがたく、アキレ・ラウ口号に関連して米帝に抵抗の姿勢を見せたものの、現ムバラク政権は、米・イスラエルとの共同の道に戻りタバ問題交渉の再開をしている。反イスラエルのアラブ団結の方向は、エジプト人民の決起を期待せざるを得ない状況にある。

3 レバノン統一に向けた三者合

意の動き

エジプト人民の決起を期待せざるを得ない状況にある。

く、政治路線上の問題としてあり、その限りではアラファート派が政治路線を修正すれば、関係を回復してもよいという立場にある。ヨルダンはアンマン合意の推進が帝国主義勢力とイスラエルに阻まれ、その打開の道を米帝に対するさらなる交渉とシリヤとの和解という二面政策として追求している。ヨルダン、シリア両国とも、関係改善は、経済的意義と政治的安定の意義が大きいが、両国とも戦術的色合が強い。エジプトにおいては、米帝に対する経済的従属構造から抜けがたく、アキレ・ラウロ号に関連して米帝に抵抗の姿勢を見せたものの、現ムバラク政権は、米・イスラエルとの共同の道に戻り、タバ問題交渉の再開をしている。反イスラエルのアラブ団結の方向は、

和攻勢として世界的規模のアラブ系米大陸住民の結束強化をもめざしており、先々月の米大陸アラブ系議員大会の招請もその一環である。今回のヨルダン・シリアの関係回復は、米・イスラエルにとって脅威となっている。アンマン合意を土台とし、ヨルダン、エジプト、アラファトを中心とした米帝に対するPLO認知の闘いに、PLO解体策動でイスラエル、米帝が応えた以上、全体の流れは、ますます、反イスラエル戦線を強めざるを得ない。その分米・イスラエルは、シリアに対する軍事的圧力を強化し、レバノンにおける左右民兵諸派の統一の動きを必ず妨害している。米・イスラエルとシリアの軍事的緊張は再び高まっている。

よ、いわゆる「三者合意」に強硬に反対しているシャムーン派を狙ったものだけに、逆にレバノン統一の困難さを示している。その後一ヶ月を経た今も、統一の動きを中心には露呈している。そこでの焦点は、政治改革の内容と同時に治安計画におけるシリア軍・レバノン軍の展開の仕方にあるだろう。キリスト教徒右派は総体として、シリア軍の東西ベイルートへの展開を望んでいない。いってみれば、トリポリ並に統制されることを望んでいない。

もう一つの動きは、イスラエル機を迎撃しようとシリア機二機（ミグ二三）が撃墜された日、アマル民兵とドルーズ民兵の戦闘が開始され、戦闘は西ベイルートを中心に五日間続いた。五日間で二〇〇人以上の死傷者を出した。停戦後、ジュンブラットは、ダマスに行き、シリアのカツダム副大統領の仲介により、西ベイルートからの全武装勢力の撤退、シリア軍オブザーバーの監督の下での、レバノン軍と治安警察軍（IS F）の展開という新治安計画の実施

した。左派内主要勢力内の戦闘の勃発とシリア主導下での治安計画の実施は、左派内統一を軸にレバノン統一を果たそうとするシリアの主導性を高めている。ドルーズは、山岳部を中心ドルーズ独自の投資会社を設立し、山岳部の開発を社会主義圏とも共同して行おうとしているが、それは、独自権益の確保をしようとしている表われであり、その他にも同様に旧来の権益確保や独自権益拡大を狙った動きがある（キリスト教右派のシャムーンが金融相、石油相の権限を利用して、内閣の確認もなしに、ガソリン価格維持のための国家助成金援助を棚上げしたのは、自己権益の確保以外の何ものでもない）。その結果ガソリン価格等は、二倍近くに値上がりし、レバノンにおけるインフレをさらに悪化させる要因になつてゐる）。

南イエメン諸国との妥協を、シリアとの協調路線に求めたのである。そこで、ヨルダンとシリアの関係回復の仲介の積極的役割を果たすこととなっている。

同時に、サウジアラビアは、イラク戦争の終結にも積極的である。一〇月上旬に開かれたGCCサミットは、イラク戦争拡大のもたらす政治的・経済的・危険性に對し、軍事的共同の強化と同時に、その戦争終結のための努力を確認している。iran外相は、一二月七日サウジアラビアを訪問、三日間の討議を開始した。iran側の立場は、変わらず、討議内容上で進展はなかつたが、会合の継続を確認しており、今後も関係改善の努力は、続けられ

してきた。それは、現在成功しつつあり、OPEC側は、一バレルあたり二二ドルから二八ドルの幅に価格を下げざるを得なくなっている。石油価格の値下がりは、石油输出収入を見込んでたてた近代化計画の推進困難をもたらし、サウジアラビアでも財政赤字を生むまでになっている。さらに、イラン・イラク戦争は、八四年以降ガulf湾域に拡大し、石油基地、タンカー爆撃等、八五年に入つてさらに拡大の様相を見せている。サウジアラビアは、それに対し、紅海側にヤンブー石油基地を建設するなどの対処をしている（ヤンブーは、イラクからの石油積み出し港である）が、イラン・イラク戦争の拡大は、経済的政治的にサウジアラ

シリアル首相は一二月一〇日、ア

ン訪問を開始し、フセインと会

平和下の経済建設には、イラン、ソ連との関係改善は不可欠となつてゐるのである。そこで、シリアは、重要な位置にある。

2 ヨルダン・シリア関係回復

シリア首相は一二月一〇日、アンマン訪問を開始し、フェイインと会合した。一月前、ヨルダン首相のダマスカス訪問に続いての、このシリア首相のアンマン訪問は、首脳会談実現への重大な一步となる。

その共同声明は、イスラエルとの個別的・直接的「和平」交渉を拒否すること、国連主催下の全当事者参加による国際会議のみが中東の正当

ダン、パレスチナのアンマン合意は事実上破産したと表明したが、ヨルダンは、アラファトと別個に独自の外交展開をしていることは明らかである。しかし、アラファトとの共同は、フセインにとって当面意味を失っている。フセインの戦略は、連邦王国の下にパレスチナ被占領地の一部を併合することであったが、米帝が妥協しない限り、その実現のパートナーとして誰を選ぶかという問題だからである。シリアは、もともとアラファートの路線政策に対し、パレスチナの大義に反するとして、批判する以上は、内部問題として関与していない。シリアのカツダム副大統領がいうように、シリアは、アラファト個人を問題としているのではない。

拠しつつ、その国家政策の枠を越えて実践展開をめざしているが、P.L.O.隊伍の分裂はますます、各国の国家政策に規定される結果をもたらしている。現在、アラブ諸国の方針が一月一九日、二〇日の米ソ首脳会談・共同声明発表と、ソ連など社会主義諸国の平和攻勢に有利な条件を形成しているのを背景に、シリアの反帝・反イスラエルの主導権を持つて、緩やかながらも反イスラエル戦線の共同組織化に向かって統一をつくりだしている以上、パレスチナ勢力もシリアとの共同を軸に反帝勢力の一翼を担う方向にしか前進の道はない。また他方において、米・イスラエルがヨルダンやエジプト、さらにはサウジアラビアら親米反動諸國家にかけた政治的望みの実現が遠のき、より軍事的反革命攻勢にてている。またシリアが、他の諸国と反帝共同軍事対峙を強化している。主体的なパレスチナ潮流の戦略と政策の一本化なしには、パレスチナ革命諸勢力の存在基盤そのものを危うくしている。

5 今後の展望

5 今後の展望
一月一九、二〇日の米ソ首脳会談・共同声明発表は、軍縮努力を相互に確認したものとして注目される。戦後世界の歴史的転換期としてソ連もまた、産業構造の転換を求められ、平和対峙によって反帝味方勢力の団結（中国を含む）と技術革新、民主主義（人民参加による社会主義）の優位性を築こうとしている。こうした動きは、一般的に世界総体として、平和勢力が大きくなっていく契機をつくりだしているともいえる。しかし、米帝の基本は、あくまで対ソ優位の条件を形成・維持しようとするところにあり、米帝のいう「デタンクト」はその中での政策としてある。それ故、米帝は一方でソ連との「データント」を実現しつつ、各個別地域においては、ソ連の進歩的民族国家に対する影響力を断ち切り、各国家・各勢力を個別撃破していくとしている。米ソ「データント」は即、全世界の和平に結びつくものではなく、人民の主体的な闘い、反帝平和勢力の発展こそ平和をもたらすものである。逆に言えば反帝平和勢力と帝国主義勢力の攻防は、各地域において、より激化するであろう。

中東においては、シリアの主導権

の下に反帝平和勢力の力が優位な反帝戦線を強化しつつ反動諸国を巻き込んだ、反イスラエル戦線が、広がりと深さをもって進みつつある。アラブレベルにおいても、シリアのレバノンにおける主導性を軸に、幅広い反イスラエル戦線が形成されつつある。こうした反帝勢力の前進は、米・イスラエルにとって大きな脅威となつており、シリアをターゲットにして逆に緊張を高めている。米・イスラエルの軍事的挑発や、ゴランガザ、西岸、南部レバノンにおける統制・弾圧を急激に強化している。それがまた味方内部における矛盾の拡大をつくりだす要素ともなつていい。それ故、反帝平和勢力内の主体的統一の努力が決定的要素として問われている。

今後も、中東全体の動向は、帝国主義勢力と反帝勢力のイニシアチブによる反イスラエルによるアラブ戦線の統一の対峙の攻防として、進展していくだろう。反イスラエル勢力の力が増大すればするほど米・イスラエルは、より軍事的挑発を激化させ、反「テロ」の名の下の軍事テロ

シリアはレバノンのどんな党派に対してもいかなる事も強制するつもりはない

活動を活発化していくであろう。六年に向けて中東における階級攻防は、ますます激化しようとしている。

資料①

シリアはレバノンのどんな党派に対してもいかなる事も強制するつもりはない

カッダム副大統領語る（抄訳）
一九八五年一月一二日

一、レバノン政治家への対応で、配慮していること

どこでもそなうだが、レバノンには、複数の世代があつて、政治を動かしている。つまり、独立以降、第一代が政治を担つてきた。これを「独立世代」とでも呼ばうか。次の世代は、この「独立世代」の影にかくれていて、目立たなかつた。第三代は、不幸にもレバノンが経験せねばならなかつた内戦の血なまぐさい雰囲気の中で育つた世代である。

で、レバノン危機解決にあたつては、こういう現実を考慮しなくてはならない。この三世代は、ある地域、あるいは宗派に限つたことではなく、長年、レバノンの政治家と私とのつきあいの中では、この現実には、いつも

と公然とイスラエルに対する反撃を表明し、イスラエルの完全撤退とし N I F I L の展開を再び要求した。一二月に入つて、三日、四日と連續してイスラエル軍は、南部レバノンのハスバヤとラシャヤに各一五〇人一〇〇人の降下部隊による戦闘、拉致作戦を強行し、P F L P - G C 派の陣地を奇襲、ハスバヤでは、G C 派側に五人の戦死者と七人の捕虜という被害を与えたという。

また、革命青年連合メンバーの一七歳の少女戦士がサイダとジェズリンを結ぶイスラエルの走狗 S L A の検問所に突撃し、S L A 兵、イスラエル兵一五名を死傷させるという決死闘争を行うなど、南部レバノンでの反イスラエル軍事闘争は増大している。南部レバノンでは、イスラエ

4 パレスチナ勢力の動き

4 パレスチナ勢力の動き

一月七日のアラファートの「カイロ宣言」以降、アラファートの主導権はエジプト、ヨルダンの潮流のなかで失われつつある。

一月二〇日、アラファート議長のバグダッド入りで始まったPLO執行委員会、ファタハ中央評議会は、対外的には、パレスチナ問題を、難民問題として扱う国連二四二、三三八号決議の拒否を再確認したが、実質的には、二四二、三三八号決議の承認、不承認をアラファートへ一任したといわれている。他方、それらの会議後、アブ・イヤドを長とする新委員会がつくられ、シリア、PNSFとの和解のための政治交渉が開始されている。PNSF側もアラファート派との和解を求めて、共にこれまで派との和解を求めて、共にこれまで

「エジプト革命団」グループがハイジャックした。米軍の援助を受けたエジプト軍は即マルタに強行着陸し、二四時間後には、ハイジャック機に突入し、無差別破壊活動を謀った。その暴力的やり方は、作戦主体を含む六〇人死亡という結果をもたらした。エジプトはかつてキプロスでのAIA会議占拠、ユウセフ・セバイ刑時同様の蛮行を行ったが、今回もその強行突入は米帝・イスラエルとキヤンプ・デービッド路線を歩むエジプトの立場を明確にした。

米・イスラエルの反テロ軍事行動に加えてエジプトの明確な米・イスラエルとの共同の立場、ヨルダンのシリアとの和解は、アラファート派をますます窮地に立たせ、アラファート派の部隊は、チュニスからイラク、

現在、パレスチナ勢力は、米国との政治交渉にあくまで固執し、「亡命政権構想」に傾斜し被占領地外の武装闘争を拒否し、占領地内の決起に望みをかけるアラファット派潮流と、あくまで P L O の築いたパレスチナ代表権・国際的位置を堅持しつつ、「人民議会」方式など下からの政治的組織化によって再び P L O の結束をつくりだそうとする P F L P などの P N S F 潮流。そして、アラファト路線に真っ向から対峙し、第二 P L O づくりをめざすアブ・モサ派(ファタハ叛乱派)潮流、また P L O と独自の地下組織体制を形成し、被占領地外で、反イスラエル・反エジプトを国際的武装闘争として闘おうとするアブ・ニダール潮流と分かれてい

体制の強化をはかっている。アマルとドルーーズの戦闘停止後の一月二四日、イスラエルは、予備役召集訓練を五ヵ月ぶりに行い、南部レバノンへの砲撃、シリア・レバノンに対する軍事的挑発を強めている。アルのナビーハ・ベリは、それに対し、一二月二日、「イスラエルとその同盟者による南部レバノンへの砲撃は、(我々の)シナイスラエル・セツル軍と左派レバノン住民の軍事的緊張はより一層高まっていく一方である。レバノンにおけるシリア主導の国民的統一が進めば進むほど、アラブの反動諸国もふくめて、シリアの主導権を認めざるをえない。シリアの指導性のもとで反イスラエル戦線を形成すればするほど、レバノンを舞台とするイスラエル・米とシリアルの軍事的対立は、激化している。

も交渉は続けられてきたが、これまでのところ進展していない。

ヨルダン、北イエメンなどへの分散を余儀なくされている。

も、この政体は大変うまく機能している。国家は、日々幾多の問題を解決せねばならぬものだ。そして、共和国大統領が、こうしたきりのない諸問題を一から十まで決済する事は、不可能事であろう。もし、そうした日常の諸問題を大統領がひきうけてしまうとなると、誰か他の人の仕事である二義的な任務で他のより重要な本来の仕事がまったくできなくなるだけであろう。

シリアでは、大統領は、実に多くの任務を担っている。もし大統領が細々とした仕事中心にやつたとしたら、今日、国内、アラブレベル、国際レベルで評価されているシリアの業績を上げられるような指導・路線的領導は、到底担えなかつたはずだと思う。どんな国でも、大統領の評価軸は日々のあれこれの仕事を成功させる事ではなく、大統領の指導下に、その国がどういう成果を得たのかにあるものである。

全レバノン人が平等の権利を有するようになるために、政治的宗派主義体制を廃止する事にある。平等とは階級を新たに市民間に作る事なのか？この合意によれば、市民間の唯一の区別は、どれだけ民族に奉仕するかしかない。これが、レバノン市民を二流市民化するという事になるのだろうか？レバノンを何回となく襲った危機の根源を根絶するべく、民的基盤の上に、レバノンを再建する事、これが合意の眼目だ。これがレバノン市民の中に新しい区別、差別をもちこむという事になるのだろうか？

もっと、具体的に話を進めよう。

レバノンでは、マロン派が、大統領軍参謀総長、軍警察長官、治安、經濟分野のトップの職を多く占めている。で、この事実は、マロン派市民の安全と安定を保障しただろうか？現実を直視しようではないか？マロン派の一定の部分は要職についているが、移住してしまったマロン派は、一体、何千人に達するだろうか？この間の戦争で、何千人のマロン派が命を失った事だろう？夫を失い、家を失い、故郷を離れねばならなかつたマロン派は何万人いるだ

は、要職を自派が占めていたとして直接に国家と結合した、近代的な統一国家、そして確固とした国家である。保障はうけられなかつたのではないのか？個人が代理を通さず、バノンでは、国家と国民の結合の仕方は、國家への忠誠というより、各宗派（というクッシヨン）を通したるものになつてゐる。レバノンの政治体制では、国民は、自分の国、領土に愛着を抱き難いのである。だからイスラエルがレバノンを侵略し、首都ベイルートまで攻めてきた時、イスラエルが敵であるにも拘わらず、かなりの人数のレバノン人が侵略を歓迎し、中にはイスラエルと取引きする者まで出たのである。

競うという事を意味するのだ。
で、もし、ある宗派が、多方面に
わたる特権をおまけにして大統領職
をとる特権を得たら、別の諸宗派は
負けじと、それに見合う特権を要求
するだろう。だから、レバノンには
一人の大統領しかいない以上、特定
の個人にこの要職の特権を与えない
で、国家体制として（選挙によつて
誰もがやれるもの）確立すべきであ
る。そうしたら、レバノン市民は、
国家に結合していくだろう。レバノ
ン市民は、レバノンの領土、レバノ
ンの統一、レバノンの人民に結合し
ていける条件ができるだろう。こう
すれば、誰もが保障をうける事にな
る。宗派が宗徒に与える保障は、他
宗派との分裂、ひいてはレバノンの
分割、つまり、それは、イスラエル
の戦略目標でしかないのだが、そう
いう分裂しか導かない。

e（レバノン人口中のマロン派の人
口を聞かれて）

それは、レバノンで調べてほしい。
シリアの場合、宗派別人口比など考
慮しない。シリアは、また、どのア
ラブ国に対しても、社会構造がどう
かという観点からではなく、そこの

政治を動かしているのか？

三、三者合意に関連して

a (各宗派入り乱れての戦闘に、スンニ派は参戦していない分、三者合意で一番得するのは、スンニ派だという意見について)

シリアは、レバノン問題を各宗派の現有権益からはみないし、宗派対立からみないようとしている。調印される事になつていてる三者合意も、眼目は、各宗派がレバノン(国家)に与えるところにある。この宗派の権益をこれくらい削って、あの宗派に与えるというようなものではないのだ。ヘゲモニーをとっている宗派に他の宗派がとってかわる事も、今の宗派政治を別の宗派政治にかえるという解決策も不可能であろう。合意は、レバノン市民と人民に決定権を返し、国家、人民としてのレバノンが平和と主権を回復する事に重点を置いている。宗派別分断強化、宗派へゲモニーやある潮流の強化をするような合意作のには、シリアは参

（と評している人がいる事について）
そういう評論を、いちいちまじめに取り上げて反論しても始まらない。ただ、言っている本人自身、そう信じていないと思う。なぜなら、レバノンが統一され、独立した主権をもつ国家として再建され、繁栄していく事以外にシリアの関心事はないという事、すべてのレバノン人が等しい権利・義務を有するレバノン、これがシリアの望むところであるという事、彼らがこれをよく承知しているからである。

（世界には）多くの政体がある。民
主的・議会的なものがあれば、民主
的・議会制の範囲内での大統領制と
いうものもある。そうして政府は議
会に責任を負うのである。したがっ
て、大統領は責任を負う存在とされ
るので、決定を下す事になる。さら
に、政府にも決定権を与える事にな
れば、誰もが責任を負わねばならな
いから、誰もが決定に参与する機会
を得る事になる。

しかし、レバノンが大統領制を採
るとしたら、（レバノン）共和国大
統領は人民に対しても責任を負う事に
なる。宗派に関係なく選出される大
統領でなければならない。レバノン
の全市民がその選挙に投票できるも
のでなければならぬではないか。
さらに、大統領が閣議の議長をつと
めないとしても、大統領が（何の役
にも立たない）ゼロであるという事
にはならない。

我が国シリアルでは、どうかと言え
ば、大統領は、開港場の各省の会議に
を「とめる」

直面した。おまけに、三代か三代とも、ものの考え方・価値観・政治的背景、独自のものを持っており、各世代の共通点はほとんどなかつた。

る人々は、合意を実践しただろう。この合意の一項には、「武装・半武装勢力の武装解除、国家への武器引き渡し」という項目がある。この項目は、実践されねばならないし、唐

b (合意草稿内容についての情報入
手後、レバニーズ・フロントのリー
ダーやの中に、"要是シリアがレバノ
ンに参戦する場合、シリアはソマリ
ーの港を封鎖する"と約束した。シリア
はソマリーライツの港を封鎖する方針
を示す一方で、ソマリーライツはシリア
の港を封鎖する方針を示さない。

る。憲法擁護に責任を負う。予算編成、戦争か平和かの決定、非常事態宣言、国家の利益がそれを必要とする時に閣議召集など、こういう一定の事態寺内国方平義会、園義の議長

人民の政治的信念を尊重してみるようしている。宗派別人口比例に、シリアが興味を抱かないのは（重大視しないのは）それでは問題が解決できないとみなしている故である。

f（三者合意に、三者のうち一者でも調印拒否した場合のシリアの対応）レバノン弁護士協会で、対案がいくつかあると、カッダムが述べた件に關して）

三者合意の失敗は、即、緊張緩和努力の失敗とは言えない。アサド大統領は、レバノンの戦争状態を終結させ、緊張緩和をもたらしたいと、固く決意している。そして、そのため多くの努力をもっている。

アラブ系米大陸議員が、ダマスカスを訪問した折、レバノンの相互に武力衝突している党派が和平回復にむけて勇気ある動きを示したこと、レバノン政治家も勇気をもって和平の方向へ歩んで欲しいとシリアが望んでいる事を、私はお話しした。

もちろん、この合意が失敗したら、折角の努力が反古になる分、怒りや失望がまきおこるだろう。だが、シリアは、レバノンのこの危機を終結させるまで骨身を惜しまぬ覚悟だから、もとのもくあみに帰してしまう

ノンに最も有益な事は何かをレバノン自身が選択して決めるものであろう。なぜなら、ある人々は、シリアー・レバノン関係を損おうと、レバノン人民内に、シリアの意図を疑わせよう画策を弄している。

b（「大シリア主義」がシリアの狙い、レバノン支配の野望があるのか？）アラブの統一は、すべてのアラブ人が、アラブの統一を願っている。人々の確信もある。

シリアが、レバノンとの統一を狙つていて、その統一を邪魔をしているのだ。もちろん、我々は、将来、アラブが統一を達成すると思っていて、その願つてているのはシリア人だけではない。レバノン人も、エジプト人も、パレスチナ人も、イラク人も、また、どのアラブ国のアラブ党派が米の陰謀の片棒をかついでいるか、との問い合わせて）確かに、米とイスラエルは、あの

手この手とやっている。米の狙いは、ばならない。

中東地域に関連して、レバノンがシリアの重荷になつてゐると思いこんでいる。イスラエルの方は、同じ理由もあるが、レバノン分割を欲している。「安全な国境」と表現するイスラエルでアラブが隊伍を整える事がないよう、アラブ世界を分裂させておくこと、この二点を中心とするイスラエルの安全をいかに作るかが、イスラエルの視点である。

五、米はキャンプ・デービッド第二段階をめざしている。その目的は？

キャンプ・デービッド第二段階とは、対イスラエル直接個別交渉を指すものだ。イスラエルとどんなものであれ、交渉する事は、これ以外の意味はない。

アラブの統一は、和平合意を作ったと、我々は考へていて。だが、アラブの下した決定と、キャンプ・デービッドの決定は、異なる質のものである。したがつて、直接か、間接かを問わず、イスラエルと交渉しようとなれば、これはキャンプ・デービッドへの転落でしかなく、それ

c（米、イスラエルが三者合意の失敗を画策している事に關連し、どの党派が米の陰謀の片棒をかついでいるか、との問い合わせて）確かに、米とイスラエルは、あの

ノン国会を見てみよう。レバノン国会が、国民統合の象徴として存在し続けたこと、レバノンの統一を代表された新国家体制方式を拒否したらどう？

それは、彼らの勝手だろう。我々は、どんな党派に対しても、圧力をかけた事もないし、将来も、かけるつもりがない。レバノンは彼らの国だし、レバノンの進路を決めるのは彼らだ。彼ら自身が自らの国にとって最善と思われる事をしたら良い訳だ。当然、どの党派も、レバノンにとって最善と思われる事を決定していくだろう。我々は、調停者としての役割を果たしている。何度も述べてきたが、調停者という事は、全党派に対して等距離を保たねば、つとまらないという事になる。

事にはならないだろう。

アメリカとイスラエルが合意流産へむけどれほど画策しているかは百も承知の上だ。アメリカとイスラエルの言いなりになつて、いる輩に一つの、君たちではなかつたか？」と。だから、今や、どこか他の國のためではなくレバノン自身の利益になる事、それは何かという事に、誰もが頭を使うべき時なのだ。

g（合意に賛成した三者は、合意実践の責任を負うのか、それとも合意は当面、ただの叩き台かという、合意の性格について）

この合意は、もつと多くの人たちに集まつてもらつて、つまり、国民会議で、検討してもらうはずの実践綱領的なものだ。議会、そして國の憲法が定めた機構が討議可決するべき性格のもの。

h（合意は、国民会議、議会、憲法的機構による検討を経て初めて実践されるものなのか？それとも国民会議を経ないで実践されるものか？）

i（軍事面での合意実践を監督する主体、シリアは、実力行使しても、合意実践に責任を負うのか、レバノン全土にADFシリア部隊が進駐するのか、という問い合わせて）

シリアは、レバノンのいかなる党派に對しても、何かを強制するつもりはない。レバノンの現状を正しく、り、主要な史的、地理的つながりも、かつ安全に解決する唯一の道は、対話と緊張緩和しかないと信じているので、対話を通して緩和を計りたい

j（ジエマイエル現大統領を見棄てられた事があるのかとの問い合わせて）

そんな質問をうける時は、実際に驚いて言つておこう。「アメリカやイスラエルの陰謀に乗つて、かつて得した事があったか？結局、損したのは、君たちではなかつたか？」と。しかし世代が、交渉能力を持つていて、いう事、これが重大であるという事だ。なぜなら現実の年齢と政治的成熟度を考慮した場合新しい体制の中でききしていくのは、この新しい世代の人々自身なのだから。だからと言つて、他の世代、人々を合意の対象外にするという訳ではない。それで、可能な限り広範な支持を得ようと努力した訳だ。

k（レバニーズ・フォーシズ、とくにエリ・ホベイカとの関係）

LFとは、多くのルートを通して接触してきた。その中で、和平実現に意欲をもつ潮流のある事がわかつた。こういう潮流の存在は、注目に値するものであり、彼らが、まじめに和平をめざしている事もわかつた。それで、合意への突破口が作れたとと思う。

シリアとレバノンは、御存知の通りはない。レバノンの現状を正しく、り、主要な史的、地理的つながりも、この合意に関連し、この合意成功に貢献した者の全員が、この新政権に参加せねばならない。

四、シリアのレバノン政策

a（シリアが主張する特殊な対レバノン関係とは何か）

d（クリスチャン、LFが合意に盛られた新国家体制方式を拒否したらどう？）

それは、彼らの勝手だろう。我々は、どんな党派に対しても、圧力をかけた事もないし、将来も、かけるつもりがない。レバノンは彼らの国だし、レバノンの進路を決めるのは彼らだ。彼ら自身が自らの国にとって最善と思われる事をしたら良い訳だ。当然、どの党派も、レバノンにとって最善と思われる事を決定していくだろう。我々は、調停者としての役割を果たしている。何度も述べてきたが、調停者という事は、全党派に対して等距離を保たねば、つとまらないという事になる。

e (治安維持について。シリア軍の全レバノン配備か否か)

前述したが、レバノン全土の治安状況を統制する治安委員会設置を合意は規定している。もし、同委員会がシリアに援助要請してきたら、シリアとしては、その援助が本当に必要かどうかを検討したい。もちろん、どういう援助を、いつ、どこに欲しいのかを決定するのは、この治安委員会である。そして、こうしたレバノンの意志決定によらぬ独自の動きは、かかるものといえども、シリアとしてはやるつもりがないのである。シリアの役割とは、援助の枠内に留まるものだ。援助要請をうけたら、自らの力量と状況を考慮するだろう。そして、援助に合意した暁には、要請を必ず貫徹していこうと考えている。

f (カツダム副大統領がレバノン弁護士協会での演説で、故郷、家から

追い出された人々が、五カ年の過渡期の間に、もとの場所に帰還できるだろうと話した事について)

三者合意の実施は、彼らの帰還を完全に保障するはずだ。

六、ゴルバチョフーレーガン会談に

a ついて

このサミットは、明らかに、最重要なものであり、あらゆる国際的のような重要な点について合意に達した。つまり、アラブ首脳会議の諸決議を遵守する。

ロ、個人的、または、部分的な解決はすべて、拒否へしたがって、アンマン合意は反古になったものと、我々は考えている)。

b (シリアーソ連、シリアー米関係について)

ソ連は我々の友人であり、いつも我々と共に立ってくれる。そして、我々が敵と対決していく事ができるようにならゆる援助を与えてくれて、いる友人である。両国の関係は、協力条約に立脚しており、大変円滑かつ良い方向へ発展している。

対米関係について言えば、これは、アラブーイスラエル紛争、中東地域の諸問題についての米の立場に規定されたものである。

七、アラブ政策

a (ヨルダンーパレスチナ合意について、とくに、ヨルダンのシリア歩み寄り政策)

この間、ヨルダン側とは、リヤドで二回会議をもつてきた。一月一

二日には、三回めの会議をもつ事になっている。前の二回の会議で、次のように重要な点について合意に達した。

i、アラブ首脳会議の諸決議を遵守する。

ハ、フェズサミット決議は、アラブ側の和平案の指針である事の合意。

ニ、(中東)和平は、国連主催下の国際会議によって確立されるべきであること。

また、個別、両国間関係については、諸問題を検討するための会議で解決していく事になっている。そして、我々は、これらの会議を経て、両国が積極的な発展の方向へ関係を深化させていくほしと考えている。

一方、我々は、心から和平を欲する。だが、和平には、いくつかの条件がある。我々の条件とは、イスラエルが全占領地から撤退すること、パレスチナ人の諸権利の承認(これ

は、パレスチナ人が自らの土地に帰還する権利、自決する権利、独立国家建国の権利を含む)である。この条件をかちとるためには、国連主催下の国際会議の場での討議と共に敵との力の均衡を作り出さねばならない。

一方で、アンマン合意を述べるとフェイイン国王が主張している。

こういう二律背反の主張をする相手とアサド大統領は会うだろうか、と

エルとの共働と比べた場合、イランの問題に答えて)

革命は、自らの意義を十分物質化もし、アラブと共に戦線を組んで対イスラエル戦を担う中で、イランの存続をもとにした政策は採らないが、それをもとにした政策は採らぬものであり、したがって、我々は、まったく関知しない。

なぜなら、我々は、感情や個人的何様式や方法を土台にしているからである。だから、ヤセル・アラファトの立場は、我々にはどうでも良い事だ。だが、彼の立場は、パレスチナの人々に関連している。

八、アラブ政策

b (シリアとの関係修復の決意を述べる一方で、アンマン合意を放棄せずとフェイイン国王が主張している)。

こういう二律背反の主張をする相手とアサド大統領は会うだろうか、と

エルとの共働と比べた場合、イラン

の問題に答えて)

九、アラブ政策

ヨルダンーアラファト枢軸を土台

十、アラブ政策

ヨルダンに限らず、いかなるアラブ国との関係も、我々は、しっかりと貫した政策を開拓してきた。それ

は、対イスラエル紛争は、アラブ全體の闘いであるから、いかなるアラブ勢力といえど、より広いアラブとしての動きの一環としてでない限り、個別に対イスラエル紛争を解決しない、というものである。

一方、我々は、心から和平を欲する。だが、和平には、いくつかの条件がある。我々の条件とは、イスラエルが全占領地から撤退すること、パレスチナ人の諸権利の承認(これ

は、パレスチナ人が自らの土地に帰還する権利、自決する権利、独立国家建国の権利を含む)である。この条件をかちとるためには、国連主催下の国際会議の場での討議と共に敵との力の均衡を作り出さねばならない。

一方で、アンマン合意を述べるとフェイイン国王が主張している。

こういう二律背反の主張をする相手とアサド大統領は会うだろうか、と

エルとの共働と比べた場合、イラン

の問題に答えて)

革命は、自らの意義を十分物質化もし、アラブと共に戦線を組んで対イスラエル戦に、イランは直接参加

したであろう。そして、あのシャー

時代の親イスラエルの立場、イスラ

エルとの共働と比べた場合、イラン

の問題に答えて)

革命は、自らの意義を十分物質化もし、アラブと共に戦線を組んで対イスラエル戦に、イランは直接参加

したであろう。そして、あのシャー

時代の親イスラエルの立場、イスラ

エルとの共働と比べた場合、イラン

の問題に答えて)

革命は、自らの意義を十分物質化もし、アラブと共に戦線を組んで対イスラエル戦に、イランは直接参加

したであろう。そして、あのシャー

時代の親イスラエルの立場、イスラ

エルとの共働と比べた場合、イラン

の問題に答えて)

十一、アラブ政策

ヨルダンに限らず、いかなるアラブ国との関係も、我々は、しっかりと貫した政策を開拓してきた。それ

は、対イスラエル紛争は、アラブ全體の闘いであるから、いかなるアラブ勢力といえど、より広いアラブとしての動きの一環としてでない限り、個別に対イスラエル紛争を解決しない、というものである。

一方、我々は、心から和平を欲する。だが、和平には、いくつかの条件がある。我々の条件とは、イスラエルが全占領地から撤退すること、パレスチナ人の諸権利の承認(これ

は、パレスチナ人が自らの土地に帰還する権利、自決する権利、独立国家建国の権利を含む)である。この条件をかちとるためには、国連主催下の国際会議の場での討議と共に敵との力の均衡を作り出さねばならない。

一方で、アンマン合意を述べるとフェイイン国王が主張している。

こういう二律背反の主張をする相手とアサド大統領は会うだろうか、と

エルとの共働と比べた場合、イラン

の問題に答えて)

革命は、自らの意義を十分物質化もし、アラブと共に戦線を組んで対イスラエル戦に、イランは直接参加

したであろう。そして、あのシャー

時代の親イスラエルの立場、イスラ

エルとの共働と比べた場合、イラン

の問題に答えて)

革命は、自らの意義を十分物質化もし、アラブと共に戦線を組んで対イスラエル戦に、イランは直接参加

したであろう。そして、あのシャー

時代の親イスラエルの立場、イスラ

エルとの共働と比べた場合、イラン

の問題に答えて)

革命は、自らの意義を十分物質化もし、アラブと共に戦線を組んで対イスラエル戦に、イランは直接参加

したであろう。そして、あのシャー

時代の親イスラエルの立場、イスラ

エルとの共働と比べた場合、イラン

の問題に答えて)

十二、アラブ政策

ヨルダンに限らず、いかなるアラブ国との関係も、我々は、しっかりと貫した政策を開拓してきた。それ

は、対イスラエル紛争は、アラブ全體の闘いであるから、いかなるアラブ勢力といえど、より広いアラブとしての動きの一環としてでない限り、個別に対イスラエル紛争を解決しない、というものである。

一方、我々は、心から和平を欲する。だが、和平には、いくつかの条件がある。我々の条件とは、イスラエルが全占領地から撤退すること、パレスチナ人の諸権利の承認(これ

は、パレスチナ人が自らの土地に帰還する権利、自決する権利、独立国家建国の権利を含む)である。この条件をかちとるためには、国連主催下の国際会議の場での討議と共に敵との力の均衡を作り出さねばならない。

一方で、アンマン合意を述べるとフェイイン国王が主張している。

こういう二律背反の主張をする相手とアサド大統領は会うだろうか、と

エルとの共働と比べた場合、イラン

の問題に答えて)

革命は、自らの意義を十分物質化もし、アラブと共に戦線を組んで対イスラエル戦に、イランは直接参加

したであろう。そして、あのシャー

時代の親イスラエルの立場、イスラ

エルとの共働と比べた場合、イラン

の問題に答えて)

革命は、自らの意義を十分物質化もし、アラブと共に戦線を組んで対イスラエル戦に、イランは直接参加

したであろう。そして、あのシャー

時代の親イスラエルの立場、イスラ

エルとの共働と比べた場合、イラン

の問題に答えて)

革命は、自らの意義を十分物質化もし、アラブと共に戦線を組んで対イスラエル戦に、イランは直接参加

したであろう。そして、あのシャー

時代の親イスラエルの立場、イスラ

エルとの共働と比べた場合、イラン

の問題に答えて)

十三、アラブ政策

ヨルダンに限らず、いかなるアラブ国との関係も、我々は、しっかりと貫した政策を開拓してきた。それ

は、対イスラエル紛争は、アラブ全體の闘いであるから、いかなるアラブ勢力といえど、より広いアラブとしての動きの一環としてでない限り、個別に対イスラエル紛争を解決しない、というものである。

一方、我々は、心から和平を欲する。だが、和平には、いくつかの条件がある。我々の条件とは、イスラエルが全占領地から撤退すること、パレスチナ人の諸権利の承認(これ

は、パレスチナ人が自らの土地に帰還する権利、自決する権利、独立国家建国の権利を含む)である。この条件をかちとるためには、国連主催下の国際会議の場での討議と共に敵との力の均衡を作り出さねばならない。

一方で、アンマン合意を述べるとフェイイン国王が主張している。

こういう二律背反の主張をする相手とアサド大統領は会うだろうか、と

エルとの共働と比べた場合、イラン

の問題に答えて)

革命は、自らの意義を十分物質化もし、アラブと共に戦線を組んで対イスラエル戦に、イランは直接参加

したであろう。そして、あのシャー

時代の親イスラエルの立場、イスラ

エルとの共働と比べた場合、イラン

の問題に答えて)

革命は、自らの意義を十分物質化もし、アラブと共に戦線を組んで対イスラエル戦に、イランは直接参加

したであろう。そして、あのシャー

時代の親イスラエルの立場、イスラ

エルとの共働と比べた場合、イラン

の問題に答えて)

革命は、自らの意義を十分物質化もし、アラブと共に戦線を組んで対イスラエル戦に、イランは直接参加

したであろう。そして、あのシャー

時代の親イスラエルの立場、イスラ

エルとの共働と比べた場合、イラン

の問題に答えて)

十四、アラブ政策

ヨルダンに限らず、いかなるアラブ国との関係も、我々は、しっかりと貫した政策を開拓してきた。それ

は、対イスラエル紛争は、アラブ全體の闘いであるから、いかなるアラブ勢力といえど、より広いアラブとしての動きの一環としてでない限り、個別に対イスラエル紛争を解決しない、というものである。

一方、我々は、心から和平を欲する。だが、和平には、いくつかの条件がある。我々の条件とは、イスラエルが全占領地から撤退すること、パレスチナ人の諸権利の承認(これ

は、パレスチナ人が自らの土地に帰還する権利、自決する権利、独立国家建国の権利を含む)である。この条件をかちとるためには、国連主催下の国際会議の場での討議と共に敵との力の均衡を作り出さねばならない。

一方で、アンマン合意を述べるとフェイイン国王が主張している。

こういう二律背反の主張をする相手とアサド大統領は会うだろうか、と

エルとの共働と比べた場合、イラン

の問題に答えて)

革命は、自らの意義を十分物質化もし、アラブと共に戦線を組んで対イスラエル戦に、イランは直接参加

したであろう。そして、あのシャー

時代の親イスラエルの立場、イスラ

エルとの共働と比べた場合、イラン

の問題に答えて)

革命は、自らの意義を十分物質化もし、アラブと共に戦線を組んで対イスラエル戦に、イランは直接参加

したであろう。そして、あのシャー

時代の親イスラエルの立場、イスラ

エルとの共働と比べた場合、イラン

の問題に答えて)

革命は、自らの意義を十分物質化もし、アラブと共に戦線を組んで対イスラエル戦に、イランは直接参加

したであろう。そして、あのシャー

時代の親イスラエルの立場、イスラ

エルとの共働と比べた場合、イラン

の問題に答えて)

十五、アラブ政策

ヨルダンに限らず、いかなるアラブ国との関係も、我々は、しっかりと貫した政策を開拓してきた。それ

は、対イスラエル紛争は、アラブ全體の闘いであるから、いかなるアラブ勢力といえど、より広いアラブとしての動きの一環としてでない限り、個別に対イスラエル紛争を解決しない、というものである。

一方、我々は、心から和平を欲する。だが、和平には、いくつかの条件がある。我々の条件とは、イスラエルが全占領地から撤退すること、パレスチナ人の諸権利の承認(これ

は、パレスチナ人が自らの土地に帰還する権利、自決する権利、独立国家建国の権利を含む)である。この条件をかちとるためには、国連主催下の国際会議の場での討議と共に敵との力の均衡を作り出さねばならない。

一方で、アンマン合意を述べるとフェイイン国王が主張している。

こういう二律背反の主張をする相手とアサド大統領は会うだろうか、と

エルとの

サミットに関しては、明確な話は、せるだけではなく、アマルとの同盟関未だ聞いていない。何の情報も入手していない。

アラブ総体がシリアにどういう経済援助を行っているかについては、多様であって、一口では表現しにくい。中にはシリアへの援助を停止した国もあるが、再考の上、再開してくれるものと期待している。イスラエルとの対峙上、この援助が必要なので。

アマル—PSP 戦闘について

アマル—PSP 戦闘について

この間の戦闘は、西ペイントにとつてのみならず、アマル—PSP の同盟にとつても破壊的なものであった。両者は、団結して、次の政治的・軍事的段階を乗り越えていかねばならないのに。

過去、我々がペイント、山岳部、南部での攻防に勝利し、ファンジ党、レバニーズ、フォーシズ、政府と対決していくのも、アマルとの同盟あらばこそその事だった。だからこそ、我々は、現在の混乱を終了さ

具体的には、我々も、アマル側も、隊伍に入りこんだ不純分子の追放に着手している。なぜなら、人々は、アマルとの対峙上、この援助が必要なので。アマル、または、PSP の政治的信念に共鳴したからではなく、強力なミリシア組織だから入っておこう、寄らば大樹の陰方式、こういう分子の追放をやり始めたという訳。彼らが、この間のアマル—PSP 戰闘へと到つてしまつたいさかいを煽ったのである。我々は、PSP として本來あるべき軍事規模にもどるよう、隊伍を整理中なのだ。そういう分子を追い出しながら。

八四年、二月六日の西ペイント蜂起、アマルも我々も、言わば水ぶくれ式に膨張して、統制がそれなくなつた。我々は、本來の軍事的規模に再編しようとしている。何となるば、(PSP 勢力拡大のために)事務所を続々開いたり、アマルと戦闘に及んだりは、我々のめざすところではない。我々は、アマルと共同で、グリーンライン沿いに、レバノン軍、ファンジ党、LF、南部での対イスラエル戦、これをやるの

おこさないですかと信じている。

今回の戦闘の発端は、レバノン國旗を第六旅団が掲げたのに対し、PSP がそれを降ろさせたとかいう事

だが、これは、唯の引き金。我々に言わせれば、現在の国旗は、ファンジストの旗だ。奴らが勝手に作つたのである。我々は、PSP とし

みれば、この旗は、一九四三年来、

おこさないですかと信じている。

だが、これが、唯の引き金。我々に

おこさないですかと信じている。

を開催した。次に、主要な点を述べるものである。

一、帝国主義—シオニスト—反動どもは、PLOを投降主義の組織に変質させる事により、PLOの息の根を止めようと画策している。

この策動の中でも最重要なものは、ペレスの「和平提案」の進展である。これは、「ヨルダンとの（和平）解決計画」と称されている。イスラエルはPLOのターフである。アルマスリを、ナブルス市長に「任命」した。同市には、市民が選挙で選んだバッサム・シャカー市長がいるのにだ。

二、ワシントンと癒着したアラブ反動陣営は、敵イスラエルとの直接交渉の露払いをしている。

三、敵の要求に応えて発表された（アラファトの）カイロ声明は、PLO指導部がどれだけ路線から逸脱しているかを、自ずと物語っている。

四、シオニストのテロルの目的は、（西岸、ガザ区において）占領軍当局、そしてヨルダン政府の犬ど

もでしかない代替指導部を、人民におしつける事にある。

五、PFLP政治局は、民族民主綱領に立脚し、また、ダマスカス合意をも強調して、レバノン危機解決にあたる事を、ここに強調する。

六、サウジアラビアが提唱中のアラブサミットについては、反帝反シオニズムへの反対をメルクマールとするアラブの団結、これをもつて、アラブの団結を統轄していく方向支持、以上を政治局として、しっかりと態度表明したい。

七、緊張激化を煽るワシントンの政策に対決しているソ連の健全な政策を、政治局は高く評価する。中東地域の危機解決にむけては、パレスチナ人民の合法的諸権利回復を土台とする解決策を追求しているソ連の主導性を高く評価するものである。

八、逸脱主義潮流に対決すべく、パレスチナ民族派の隊伍をさらに整えるよう、政治局は、重ねて訴える。また、PLOを民族主義路線の正道にとりもどす準備を進め、

アンマン合意を破棄するべく、パレスチナ人民大会開催を早期にかちとりぬく重要さについて、強調しておきたい。

政治局は、PNSFが一月七日に発表した声明を評価するものである。そして、DFLPとPCPの声明も、逸脱主義潮流に反対したパレ

スチナ民族統一のための会談をよびかけており、意義あるよびかけであると考える。

政治局は、PNSFが一月七日に発表した声明を評価するものである。そして、DFLPとPCPの声明も、逸脱主義潮流に反対したパレ

資料④ "アルハダフ"（八五・一・一八日号）論説の要約

『資料・中東レポートI』

重信房子編著 ウニタ書舗 ￥2500

●中東和平イニシアチブをめぐる動向●PNCをめざすPLOの問題と矛盾●第16回PNCの示した方向●第16回パレスチナ国民会議 決議●高まる戦争の危機●分裂の企てと統一努力●敵の攻勢＝"小さな問題"と味方内の問題●レバノン内戦の行方●パレスチナ解放人民戦線の現状認識●米国の好戦的展開と中東情勢●世界的布陣をめざす米帝と中東の攻防●1983年の闘いの概括と今後の展望

——カイロ声明は（イスラエルの）告している討議をアルハダフは暴露——

——アルハダフはカイロ声明は（イスラエルの）承認への準備ステップ——

"アルハダフ"はカイロ声明は（イスラエルの）承認への準備ステップ——

"アルハダフ"はその論説で、入手できた会議について報告し、アンマンからの確かな情報を通じて、フセイン王がアラファトに"空約束"はないのならアンマン合意と共同行動の放棄をするよう警告した。

"アルハダフ"はその論説で、入手できた会議について報告し、アンマンからの確かな情報を通じて、フセイン王がアラファトに"空約束"はないのならアンマン合意と共同行動の放棄をするよう警告した。

フセイン王は、アラファトに、武装闘争の禁止と、国連決議二四二、三三八およびイスラエルの存在の権

資料⑤ 一九八五年 武装闘争高揚の年

「民主パレスチナ」第一号
一九八五年一〇月号

の承認について、決定的かつ迅速なステップと立場をとるよう、要求した」と論説は加えた。

どのように米の条件をのむかについて長い討議をしたあとで、アラファトは要請された件について、研究討議するための会議をする時間を要請し、あとで、その結果を伝えるためにヨルダンにもどってくると語った。

アルハダフの論説は以下のように言っている——フセイン王は合意し、アラファトに以下の点について即受け入れるよう要請した。

(1) アンマン合意を基礎にして、ヨルダン政府に独立の政治展開の権利を与えること。

(2) 共同行動の参加者をPLOの執行部からではなく被占領地のパレスチナ人から選ぶこと。

そのあと、"アルハダフ"の論説は以下のように述べる。フセインのプレッシャーをおさえる目的で、アラファトはエジプトの指導者に会いに行く。彼らはイスラエルと米帝の条件を受け入れる必要性を説得した。それがアラファト・ムバラク合意。

直接交渉の最終準備が終った時アラファトは二四二、三三八決議を受け

入れ、公けにイスラエルの存在する権利を認めるだろう。

"アルハダフ"によれば、ムバラク・アラファトの合意は、イスラエルが一九四八年に占領した土地での武装闘争の放棄と隣国（シリア・ヨルダン・エジプト・イラク・レバノン）からの軍事作戦の停止を意味している。

"アルハダフ"はカイロ宣言をすべての武装闘争禁止とイスラエル承認の準備の第一歩として記述する。

論説はいう。イスラエルと米帝と反動の策略を阻止する唯一の方法は、まずすべての問題と相違を忘れ、修復を望むすべての組織、勢力、団体、パレスチナ人の動員に努めることが、正主義路線に反対し、アンマン合意とおり、第二に、米の清算主義計画を信じている、フセイン・ムバラク・アラファト同盟の危険性を打開するアラブ民族進歩戦線を組織することである。

——さきに英語でメモし、おくれて訳したこともあり、多少、不鮮明な点もあります。

ろがっていった。今年前半、とうとうシオニストの指導者も入植者も放置できないレベルにまで発展した。

それで、敵どもは、パレスチナ革命の下部構造を壊滅させるという目的からみた時、「ガリラヤに平和を作戦」が有効だったのか否かという論議をむし返す破目になった。その下部構造が、パレスチナ内武闘の発展にとつて外的な主軸であったのだ。

パレスチナ内の軍事闘争の高揚は、大変、すばらしいものである。四八年に占領されたパレスチナも含めて、パレスチナの炎がシオニストを襲った。シオニストの偵察隊は、ライフルや手榴弾の攻撃にさらされた。敵が手を焼いたのは、新しい攻撃つまり、遠距離操作の爆弾攻撃であつた。また、シオニスト兵士を誘拐、処刑する新戦術も編み出した。加えて、敵は、我らが戦士を割り出す事に、大体失敗していった。シオニスト指導部は、パレスチナ内で活動している細胞が、機構上、組織上、作戦立案、作戦遂行面において、有効なものになつたからであると結論づけた。

こうした努力の結果、占領下の祖国では、質的にも量的にも武闘がひ

△敵の悩みの種▽

敵側は、パレスチナ内の武闘高揚

先述のメアリによれば、五月の捕虜交換は、たとえ逮捕されてもやがて釈放（交換で）される可能性ができたから、パレスチナ青年が勇んで攻撃に出ていく条件を作ってしまつたとの事。

昨年の夏、ラビン国防相は、殺人容疑者の家屋破壊、反体制色の濃いパレスチナ人の強制国外撤去などの措置で、コマンド活動に対しては「断固たる政策」とると豪語してきたシャハクも、容疑者の裁判ぬき拘留（「行政上の拘留」と称す（訳注））措置を擁護しつつ、効力をもたせようと思つたら、罰は迅速に課すべしとしている。同将軍は言う。「こうした措置が大変有効な事は、はつきりしている。どの程度かについては触れないが、隣の家がふき飛ばされるのをみて、コマンド活動をするのを思い止まつたなんて、誰も言ひはないものだ」

一、下馬評

a 予測される議題と結果

b ガルフ戦のあおりを受け、ガルフ総体の安全が脅かされているので、これに対処していく共同防衛戦略の確認。サミット前のGCC国防相会議で、大枠は確認されているもの。

アラブの統一再編

対立、紛争中のアラブ国家の調停

ファハド国王からは、シリア―ヨルダン調停工作報告がある予定

第六回 GCC（ガルフ協力評議会）サミット
一九八五年一一月二日～六日

暴力の引き金になるのではと憂慮する人がいた。「本当に、この種の行動には“これだ”という決め手がないが、何とか新しい対策（たとえば道路検問の強化、情報活動の強化など）を立てていかねば」と、アムノン・シャハク将軍（西岸を含む中央軍管区司令官）は語る。

この新しい型の攻撃の波は、防止がむずかしいと専門家は口をそろえて言っている。反面、かつてのコマンド組織がお家芸にしていた大規模な爆破や、人目をひく人質拉致作戦に比べると、被害も少ないという面があるが。

ットでガルフ戦終結へむけた新しい考え方を検討していくだろう。中東和平建設過程にPLO抜きは、考えられぬ。現情勢下では、エジプトが再びアラブ世界に復帰する必要があると、同大統領は語っている。

ガルフ戦停戦へむけた調停は、現在、条件が整わないとして、見送られる見込み。ヨルダン＝PLO合意問題については、八二年九月のフェズサミットの立場を堅持する事の再確認になろう。

とりもどし両国民が自國資源をより有効に用いて繁栄していけるように、交戦中の両国が善隣関係を回復する日が一日も早く来て欲しいと、我々は、強く望んでいる。

本日、GCC元首は、GCC設立の目的を実行し、ガルフ諸国人民の宿願を果たしていく共通の道程を必

ットでガルフ戦終結へむけた新しい考え方を検討していくだろう。中東和平建設過程にPLO抜きは、考えられぬ。現情勢下では、エジプトが再びアラブ世界に復帰する必要があると、同大統領は語っている。

ガルフ戦停戦へむけた調停は、現在、条件が整わないとして、見送られる見込み。ヨルダン＝PLO合意問題については、八二年九月のフェズサミットの立場を堅持する事の再確認になろう。

とりもどし両国民が自國資源をより有効に用いて繁栄していけるように、交戦中の両国が善隣関係を回復する日が一日も早く来て欲しいと、我々は、強く望んでいる。

本日、GCC元首は、GCC設立の目的を実行し、ガルフ諸国人民の宿願を果たしていく共通の道程を必

今日、大変微妙な国際、地域情勢下に、GCCの首脳会議を開いていくが、中東地域においてGCCが安定の要素を作っていくよう、GCCの役割を再確認していく事が最重要である。

オマーン到着時のファハド国王演説
「GCCを設立したのは、GCC諸国人民の福祉発展へむけ、集団的努力を行いたいとする各国共通の志からであります。今回のサミットでは、安全、安定、繁栄を希求する

両国は、南部レバノンでのイスラエル侵略軍とその手先に対する英米的レバノン民族抵抗運動の闘争を支援する必要と同様に、レバノンの独立、主権、アラブ国家としての性質と領土的保全を全面的に支持し、姑大することの重要性を表明した。

両国は、全レバノン領土からのイスラエルの早急の全面的、無条件の撤退を要求した。そして、レバノンの統一と領土保全と平和の回復、治安と安定の回復のために、すべてのレバノン国民の民族的な再建統一を達成するすべての可能な努力をする必要について強調じた。両国の関係性について、両国は、経済協同と労働の発展について、満足を表明した。両国民の利益になる多様な分野の共同の促進についても決定した。

あなたは、TWA機の時、人質のために交渉に応じました。それに、イスラエル、エジプト、エル・サルバドル、ソ連など他の国々も、交渉に成功した例が多々あります。TWA機の時、そして他の件で交渉に応じた国々は、罪のない人質の生命を救う事を第一目的としていたのです。我々は、あの時と同じ配慮をしてほしいのです。他には、どんな手もありません。

我々の誘拐者が言うには、彼らはシリア、イランとは何のつながりもないし、レバノンのシーア派リーダーとも関係がないとの事です。そして、誰も彼らの身分、素姓を知らぬいから、どんな圧力にも屈服しないと言っています。彼らは、どんな事にも心を動かさないし、ますます我慢の限界に近づいていると言っています。

大統領、あなたは他のルートで（我々の釈放を）かちとろうとしますが、この一八ヶ月、人質のうち一人も釈放できていません。我々は脱出できるチャンスは万に一つもないのです。我々の誘拐者は、もしも人質救出の試みがなされた暁には反対します。

新しい型の攻撃にさらされて、イスラエル人

縮み上る ロイター電 テル・アヴィヴ 一二月二日発

新しい型の攻撃にさらされ、イスラエル人縮み上る

ロイター電 テル・アヴィヴ
一二月二日発

パレスチナのコマンド組織との攻防戦には熟練しているイスラエル治安軍も、誰に命令された訳でもないのに、イスラエル人を殺したり刺したりする若いパレスチナ青年の急増にすっかり手を焼いている。この間、イスラエルと被占領地内にいるのが、そのうちの約半分はこうした個人的な行動とされている。昨年は、殺されたイスラエル人の数は八人だけだった。

イスラエルが過去一八年間占領してきた西岸、ガザで育った若い世代が、銃、ナイフ、爆弾で、イスラエル人を攻撃しているのだ。彼らは、大体ナイフを使い（この七カ月に二件のナイフ攻撃があった）、またはイスラエル軍から盗んだり、イスラエルのヤクザから買ったりした手榴弾を使う。東エルサレムのアル・ファジル紙（「暁」）主幹のハンナ・シニオラは、こう述べている。

「こうした行動が出てくるのは、イスラエルの占領が長年続いたからです。いくらがんばっても、イスラエルが一向に平和の方向をむかない事に対し、若い世代がすっかり絶望している事を示しています」。また去年の夏、とうとうイスラエル占領軍の大半を追い出すに至った、レバノンイスラム教徒の執拗な闘い（イスラエル軍は甚大な被害をうけた）に触発もされているはず、こう同氏は信じている。

アリエル・メマリ（テル・アヴィヴ大のコマンド活動研究の責任者）は、今年五月の捕虜交換が悪い影響を与えていると、指摘している。解放された一一五〇人のうち六〇〇人は、近くが西岸の自宅へもどる事ができた。政治家の中には、反イスラエル

一九八五年一月一日（月）

二月六日

- ・ベリ、インタヴュ
- 「米・イスラエルがレバノン内戦解決を妨害している」
- ・フランジエ代表（息子のロベル）、アミン代表（レバノン軍情報部部長のシモン・カッジス）がシリア入り。
- ・フセイン国王、イスラム同士会についての責任を認め、シリアとの関係改善を表明（資料参照）。
- ・レバノン南部の対SLA作戦四回。
- ・アラファト（アブ・ダビのTVイントラヴュ）
- 「カイロ宣言は、事前にアラブのリーダーたちと相談したもの。ム

激動の中東

・ガルフ戦争、国際情勢、中東問題
討議のため、トルコ大統領がアブ
・ダビを三日間の公式訪問予定。
パキスタンのハク大統領とも、ア
ブ・ダビでおちあう事になろう。

一月一二日（火）

・東ベイルートで、レバニーズ・フ
ロントのリーダーたち（シャムー
ン親子、エリ・カラメなど）の調
定例会議を狙った車爆弾による自
決闘争。死者四名、負傷者二三名
の被害。

「自由クリスチャン青年組織」な
る主体から、電話で伝えられた鬭
争の目的は、「自分の個人的利益を
第一にし、クリスチャンの利益を
イスラエルやシリアに売り渡す御
都合主義者どもへの攻撃」だが、

- ・英カンタベリー寺院主教秘書のリード・ワイト氏、四人の米人人質釈放調停のためベイルート入りする、発表。同氏は、リビア―革関係悪化時も、リビアへ飛び、革人捕虜の釈放に活躍。
- ・昨日、ベイルート有力紙アンナハーレル記者が誘拐されたのに抗議し、新聞スト。日刊紙発刊なし。
- ・アラファト、アンマン入り(近日中に、バグダッドで P L O 中執会議開催予定)。
- ・ヨルダンのリフィアイ首相、ダマスカス訪問。
- ・エジプト・タバ問題で、イスラエルとの交渉を再開する(来月から)。
- ・シリア共産党、政治局会議後、レバノン民族抵抗運動の犠牲と英雄主義(対イスラエル、「S L A」)を

- イスラエル
西岸ジエリコ市近くのパレスチナ
キャンプ（アイン・スルタンとマ
クバト・ジャベル）で、五〇〇〇戸
の家をブルドーザーで倒壊さ
この二つのキャンプには、四八六年
にパレスチナから避難してきたパ
レスチナ人が住んでいる。三万七
が寒空に放り出された。
- ラビン戦争相、今日から四日間、
公式米国訪問。
ペレス首相、シャロン商工相の就
任要求。
- カルツーム（スードン・AP電
ヌメイリ腹心の裁判で、イスラエ
ル－CIA共働「モーゼ」作戦の
内容が明らかになる。ヌメイリ時
代の国家公安委員長が、元副大統

また、駐イランサウジ外交官は、テヘランにてイラン外相と会見。イラン最高裁裁判長は、この接触について、好意的に論評した。一方駐クウェートイラク大使はGCCのこの動きを支持すると論評。

東の中の日本

バラク大統領の臨席を求めて発表したのも、米世論の支持を得たためである。武装総体の放棄ではなく、イスラエル占領下での武闘は継続、強化していくのだ。いずれにせよ、PLOの結節点を、同言が画面上によらう

「アラブクリスチヤンの前衛」をな
る主体からは、「クリスチヤンの同朋のためには、さらなる犠
牲も辞さず」という電話通告も入
った。肝心のリーダーたちは、か
なり傷を負ったのみ。

讃える。
一月三日(水)

ガルフ人民の宿願実現にむけ、鋭意努力いたしたい。GCCは、中東地域人民すべてをつなぐ歴史的絆の反映であり、そういう絆を現実に強化していくものとして、共通の目標を達成している模範でもあります。」

オマーン・スルタン・カッブース
サウジアラビア・ファハド国王
U A E ザイード・ビン・スルタン大統領
カタール・エミール・アッターニ

オマーン・スルタン・カッブース
サウジアラビア フアハド国王
U A E ザイード・ビン・スルタン大
統領
クウェートエミール・サバハ
バーレーンエミール・アル・カリ
フア
カタールエミール・アッター二
第六回 G C C サミットスポーツクス
マン(オマーンの情報相)が、非公
開会議内容について、記者会見
本会議が現在討議した件は、「ガ
ルフーイラン戦」。「何とか、終結
を組織しよう」という方向で討議があ
った。また、カサブランカサミッ
トが設置したアラブ和解委員会の報
告もあり、シリアーヨルダン和解工
作は成功、リビアーアラク和解工作
も一定の進展を作ったという評価を
うけた。G C C 首脳陣は、この和解
工作がさらに、統一アラブ建設にむ

クウェート国防相の記者会見（主旨）
「GCC内の軍事協力は、防衛システム、軍備、訓練分野である。包括的戦略に立脚して軍事提携をすすめ、軍の指揮に活用するべくGCC内の情報交換の迅速化措置をとることにした。」

「G C C 内の軍事協力は、防衛システム、軍備、訓練分野である。包括的戦略に立脚して軍事提携をすすめ、軍の指揮に活用するべく G C C 内の情報交換の迅速化措置をとる事にした。」

口措置の統一が勧告されているが、今後締結されるであろうガルフ防衛条約には対テロ措置条項は、未だ含まれていない。（情報通の説）

また、オマーン外相は、「共通の利益のために、イランとの問題を解決すべく」イランに話をしていく方向が出されていると語る。

口措置の統一が勧告されているが、今後締結されるであろうガルフ防衛条約には対テロ措置条項は、未だ含まれていない。（情報通の説）

また、オマーン外相は、「共通の利益のために、イランとの問題を解決すべく」イランに話をしていく方向が出されていると語る。

六、(G C C 経済統一へむけた)二六項の経済合意実施上の措置を検討し、各種の経済協力プロジェクトを承認し、さらに新しい経済分野の協力を進めるよう閣僚会議に要請する。

六、(GCC 経済統一へむけた)二六項の経済合意実施上の措置を検討し、各種の経済協力プロジェクトの日程を承認し、さらに新しい経済分野の協力を進めるよう閣僚会議に要請する。

七、GCC 農業政策、工業開発統一戦略、共同した教育政策の方法、ガルフの環境保護の方法を確認する

因みに、対テロ共同については、一月五日、リヤドに「安全研究・訓練センター」がオープン。これはアラブ各国警察長官レベルで設置が要請されていたプランを内相レベルで承認し、サウジが設立資金、土地を提供して、誕生させたもの。

け前進を作っていくだろうと、樂觀視している。

(二日間で非公開全体会議三回。石油市場問題、中東問題、レバノン問題、G C C の政治・経済・安全・防衛問題に関する個別会議が盛んにもなった)

域に対する侵略に耐えうる合同軍創設で、その名も“半島の盾部隊”。実体としては、既に、合同演習という形で、建設が進められてきていたもの。さらに、防衛上の協力を進め GCC 各国防衛大学の講義要目を單一化し、訓練強化、情報交換などを

唯一合法の代表としての P L O への支持を再確認し、イスラエルのチュニス爆撃を非難する。

四、レバノンの主権、独立、領土の統一性を支持再確認する。

五、カラブランカ緊急サミットで日本駐箚委員会は、アラブ

レバノンのすべての人々よ、南部防衛戦に起て！」
また、アマル政治局長のアケフ・ハイダルは「イスラエルよ、お前の挑戦状は、しつかり受け取ったとえ、毎日血を流す事が続こうとも、我々は、一インチ一インチと、必ずレバノンの土地全部をお前の占領から解放してみせよう」と、決意表明。

b 中央保安委員会開催。

c 仏軍、第八八八丘（スクル・ガルブ区）山岳部からバーブダの大統領官邸への通路をおさえる要地からの撤退（一九日）を発表。仏停戦監視オブザーバーが残した要塞の撤去、ただし、その後に新規

・ イラン外相がリビア訪問。
アキレ・ラウロ号鬭争の戦士たち
五人に第一審判決。
アイサ・ムハムマド・アッバス（P
L Fリーダー、アブル・アッバスの親戚と言わ
れている）は、武器密輸（A Kライフル四丁、手榴弾八ヶ、信管九ヶを石油輸送タンク車の底にしこんでチュニジアーエジ
ニア間の船便でもちこんだ）と偽製バスポートによる不法入国の罪。判決は九年の実刑と一七〇〇ドルの罰金。
マジド・ユスフ・アルモルキ（ヨ
ルダン生まれ二二歳。鬭争部隊のリーダーとされる）は八年の実刑

- ・ヴァチカン
教皇が「レバノンに新しい政治バラ
ンスを作ろう」とアピール。
- ・ペイルート
- ハリリ基金（レバノン系サウジ実業家ハリリがレバノン学生に与える奨学金制度）理事会が記者会見
今年度の応募者は二万五〇〇〇人
うち一七日に約五〇人が英へ、一九日には二〇〇〇人が仏へ留学する
と発表。
- ・オマーン建国記念日。ムバラク出
席。
- ・南レバノン
イスラエル機、レバノン領空侵犯、
シリアル機が迎撃に出撃、二機撃墜
- 一月一日（火）

- ・ 統領は、カタールTVのインタビューに応えて、中東和平実現のための直接交渉を提案。
- ・ 「もし、（国連）安保理国、とくに常任理事国が抗争当事者同士の直接交渉会議中、その妨害をせぬ形で、介入できたら、直接交渉派と国際会議派、この二つの派をつなぐ事ができるのではないかと、私は信じる」
- ・ アラファート
- ニュー・デリーの非同盟青年大会開会あいさつ。非同盟諸国間の共同強化をよびかける。
- 一月二〇日（水）
- ・ 南レバノン
- イスラエルのスペイを追跡中のア

● 一月一八日（月）

・南部レバノン

一六日にクーニーネ村の「SLA」拠点が急襲され、一四人の「SLA」兵士が捕獲された件への報復続く。クーニーネ村は包囲されたベイルート

a クーニーネ村の直面する大弾圧に關し、シェバ・アブデルアミール・カバランは、記者会見。「村人は、テロリストにさらされ、イスラエルとイスラエルの犬どもによつて、家から叩き出されるだろう。レバノンのすべての人々よ、南部防衛戦に起て！」

また、アマル政治局長のアケフ・ハイダルは、「イスラエルよ、お前の挑戦状は、しつかり受け取ったとえ、毎日血を流す事が続こうとも、我々は、一インチ一インチと、必ずレバノンの土地全部をお前の占領から解放してみせよう」と、決意表明。

b 中央保安委員会開催。

c 仏軍、第八八八丘（スクル・ガルブ区）山岳部からバーブダの大統領官邸への通路をおさえる要地からの撤退（一九日）を発表。仏停戦監視オブザーバーが残した要塞の撤去、ただし、その後に新規

・ イラン外相がリビア訪問。
アキレ・ラウロ号鬭争の戦士たち
五人に第一審判決。
アイサ・ムハムマド・アッバス（P
L Fリーダー、アブル・アッバスの親戚と言わ
れている）は、武器密輸（A Kライフル四丁、手榴弾八ヶ、信管九ヶを石油輸送タンク車の底にしこんでチュニジアーエジ
ニア間の船便でもちこんだ）と偽製バスポートによる不法入国の罪。判決は九年の実刑と一七〇〇ドルの罰金。
マジド・ユスフ・アルモルキ（ヨ
ルダン生まれ二二歳。鬭争部隊のリーダーとされる）は八年の実刑

- ・ヴァチカン
教皇が「レバノンに新しい政治バラ
ンスを作ろう」とアピール。
- ・ペイルート
- ハリリ基金（レバノン系サウジ実業家ハリリがレバノン学生に与える奨学金制度）理事会が記者会見
今年度の応募者は二万五〇〇〇人
うち一七日に約五〇人が英へ、一九日には二〇〇〇人が仏へ留学する
と発表。
- ・オマーン建国記念日。ムバラク出
席。
- ・南レバノン
イスラエル機、レバノン領空侵犯、
シリアル機が迎撃に出撃、二機撃墜
- 一月一日（火）

- ・ 統領は、カタールTVのインタビューに応えて、中東和平実現のための直接交渉を提案。
- ・ 「もし、（国連）安保理国、とくに常任理事国が抗争当事者同士の直接交渉会議中、その妨害をせぬ形で、介入できたら、直接交渉派と国際会議派、この二つの派をつなぐ事ができるのではないかと、私は信じる」
- ・ アラファート
- ニュー・デリーの非同盟青年大会開会あいさつ。非同盟諸国間の共同強化をよびかける。
- 一月二〇日（水）
- ・ 南レバノン
- イスラエルのスペイを追跡中のア

- ・ レバノン
- 国連総長派遣の中東特使と、カラミ首相が会談。アツサファイル紙「イスラエルがあくまで「セキュリティ・ゾーン」を勝利に保持するのなら、レバノンは、国連安保理に提訴せざるをえない」とカラミ首相語る"
- ・ ガルフ戦
- イラクがカーラグ島爆撃。
- ・ イスラエル
- 一月一五日（金）
- 生活費上昇率＝一〇月度は四・七%。
○月度のそれは二四・三%。生活費上昇率が四%を超えたので、給
- 九月度のインフレ率三・〇%、一

・米帝 計四名の戦死者出す。

・ a シュルツーラビン会談。

・ b ペンタゴンがバークレーへの九〇〇万ドル相当のタンク五四台と弾薬・部品売却を発表。

・ 一月一六日(土)

・ レバノン

・ F D R

・ 南部で、アマル部隊が「S L A」拠点急襲し、一五人を捕虜に。

・ イスラエルは、四カ村とナバティエ市を砲撃。

・ 外相ゲンシャーを中東へ派遣。オマーン、エジプト、ヨルダン、パキスタン、インド歴訪予定。

・ ラバト 「アラブ和解委員会」(カササグラ

- シリア
「整風運動」（アサド大統領指導下のバース党による奪権）一五周年記念。マシャルク副大統領は、明発表。
- U A E
アブ・ダビの経済使節団、モスクワ入り。
- ブラッセル（ベルギー）
I A D L（民主弁護士国際協会）が、レバノン、パレスチナ人に対するイスラエルの大量虐殺非難声明発表。
- U S A
パキスタン入り。「現情勢は警戒を要するほど緊迫。イスラム世界のさらなる團結を」とぶつ。この後、アカバ湾へ飛び、フセイン国王と会談。

- ・南部レバノン
- イスラエル軍、数カ村をしらみつぶしに家宅捜査。村人を多数拉致し、レバノン民族抵抗戦士に協力した容疑者の家々をこわして回る。七カ村へは砲弾の雨をふらせる。
- ・ベイルート
- 米人人質釈放の調停者、レバノン出発。
- ・ヨルダン
- フセインーアラファト会談。
- ・イスラエル
- a ペレス、もつと多數のユダヤ人の移住を許可するよう、ソ連に要請。
- b シャロン、訪米。
- 「ゴラン高原は、『セキュリティ・ベルト』なので、撤退しない」と発言。

領はこの行動協力で二〇〇万ドル
もうけた旨、証言。

一月四日（木）

イスラエル

ペレスの対ヨルダン交渉政策を非難し、謝罪要求されていたシャロモンが、やっと書簡による陳謝。連立政府倒壊の危機何とか乗りきる。
国連

中東非核地帯創設へむけた決議草案通過。

- U A E ただし、三・八%のみ。
- ソ連との外交関係樹立。ガルフ国の中では、クウェート、オマーンに統いて三番目に、ソ連との関係作りに着手。
- ガルフ戦 場を報復爆撃。
- レバノン イランがイラク北部のセメント工場を報復爆撃。

- トルコ
 - a 米帝——トルコ「援助提供・基地貸与」合意（八〇年調印）再検討スター。トルコ側が援助拡大を要求しているが、米帝は「NATO

沙の要旨の言ふとおり演説を行つた。シリアレベルでは、国民生活の政治・経済・社会・文化面で画期的な躍進のスタートを作つた。アラブレベルでは、アラブ－イスラエル紛争において、反帝・反シオニズムの戦略的な結節点を画した。今後も、さらに国力を高め、アラブの対イスラエル戦略バランスをかちとり、統一・自由・社会主義の目標にむかって進もう。

マル部隊が、UNIFILアイルランド軍地区を通過しようとしたのをアイルランド部隊が阻止（威嚇射撃）。アマル部隊も応戦。双方とも被害出さず、アマルが謝罪して、解決。

・アラファト

バグダッドでPLO執行委員会、ファタハの中央委員会開催。

・韓国

韓国外相、GCCとの関係強化のため、ガルフ歴訪中。オマーン建国記念日出席後、一九日、クウェートへ。二五日にはバーレーン入り予定。

・ジエノア（イタリア）

判決を受けたアキレ・ラウロ号事件の戦士のうち、バッサム・アブ・アシケルは未青年である事がわかつたので、判決無効。少年裁判所で、改めて裁判を受ける予定。

・ペイルート

ドルーズ対シーア派の武力衝突。

・一月二一日（木）

国連安保理決議二四二、三三八拒否を再確認。

また、PLO北京代表のタイエブ・アブダヒームをカイロ常駐に任命。クウェート通信がアラブ連

盟筋情報として伝えるには、これでPLOは、ヨルダンに続いて、アラブサミット決議違反（エジプトボイコット破り）を犯した事になるとの事。

・スイス

ゴルバチヨフーレーガン会談終了。

・西ペイント

西ペイント・ドルーズ対シーア派戦闘継続。

・a

ジエマイエル大統領は、シリアの役割を高く評価。西ペイントの

戦闘に言及し、「軍隊以外の武装力は、抑圧・侮蔑の道具にしかならぬ」。三者合意については、「基本的な改革は必要なるも」「憲法で定めた体制の変革にまで着手すると」、せっかくの話し合いを頓挫させてしまうと、批判。

・ヨルダン

フセイン国王、北イエメン初訪問。アラブ和解委員の役割を高く評価。

・米帝

a ゴルバチヨフーレーガン会談の報告を、マーフィがシャミール外相に。イスラエル政府スピーカー

ンは、「同会談では、中東問題は討議されなかつたという報告しがなり立てるシユルツの意見に代弁される。

・イスラエル

a ポラードスペイ事件発覚にあわて、ヨツト・ガンで追いかけること、これがしかない」

・b

イスラエル大使のピッカリングは、曰く「両国の関係は、一つの事件で左右されてしまうほど弱急ぎ、ワシントン入り。

・c

駐イスラエル大使のピッカリングは、曰く「両国の関係は、一つの事件で左右されてしまうほど弱くもなし、長い歴史をもつて代弁される。

・d

イスラエル旅行中の駐米イスラエル大使、急ぎ、ワシントン入り。

・e

テロリストのキャンペーン作戦で、レスチナの大義を損う目的のものでしかない。……PLOに敵対したテロリストのキャンペーン作戦だ。……地中海諸国は、ハイジャック犯人に何の便宜も与えていかないようにしてほしい」

・f

TWA機乗つ取り作戦に続き、今回もアテネ空港発の機が狙われた件について、ギリシア当局は、「アテネの保安は、どこの国よりも劣らない」と声明発表。それに、エジプト機には保安官四名が乗り込んでいる。搭乗前のチェックは二重になっている（チェック・インの時の大荷物検査、パスポートコントロールでの手荷物検査、身体検査、搭乗直前の検査）。

d 米帝は、「ハイジャック犯とは、断固取引

・g

臨時軍事評議会副議長を団長とする訪ソ使節、一二月初旬、出発予定。

・一月二五日（月）

（国務省は、在スードン米人の数は約一〇〇〇人と発表）。FBIは、米海軍勤務のジョナサン・ジェイ・ボラードをイスラエルの傭われスパイの疑いで逮捕（ボラード事件、発覚）。

・OPEC

八四年度のOPEC石油輸出は、前年度比三%減少。

・西ペイント

ドルーズ対シーア派の戦闘継続。

・d

ジエマイエルの戦闘、解决へ。トルコ

・トルコ

焼かれたビル一九に達す。イスラム系の「祖国の声」放送は、二〇日からの戦闘で死者三〇人、負傷者一〇〇人と発表。

・ソ連

タスが、イスラエルによるシリア領空侵犯を挑発と評価。

・イスラエル

緊縮財政による予算カットをめぐり、蔵相と保健相がののしり合い。

・アラブ

藏相は、保健相解任をペレスに進言。

・b

スードンの米大使館員の撤収開始。

・西ペイント

ドルーズ、アマルの戦闘、停戦成立。

・c

ヨルダン（フェイン帰国）

・d

アンマンとサナー（北イエメン）

・e

b 米人人質釈放工作中のワイト、アーネスト

・f

ジエンブルラットがベリを訪問し、エジプト航空機ハイジャック闘争立。

・g

「アマルへの攻撃命令を下した誤ち」を謝罪（四日間の戦闘で死者六五名、負傷者三〇〇名とされる）。

・西ペイント

a ドルーズ・アマルの戦闘、解决へ。ジエンブルラットがベリを訪問し、エジプト航空機ハイジャック闘争立。

a エジプトは、特殊攻撃部隊をマルタへ派遣（機は、チュニスへの着陸）。

b ミ人々質釈放工作中のワイト、アーネスト

c エジプト

d エジプトは、特殊攻撃部隊をマルタへ派遣（機は、チュニスへの着陸）。

で共同コミュニケ同時発表。中東反政府爆弾闘争を過去三年間展開（イラクとの共同）してきたとう四人のイラク人青年がTVで告白。"シリアを本拠とし、iranで訓練を受けた。アラビア語を話すイラン人の指導する運動に参加した（非合法のシーア派組織、アル・ダワ党を指す）"

トルコ民主左派党は、党首エチエヴィトの妻ラハサンを新党首に選出。

カイロ行きエジプト航空機、乗つ取り作戦開始。

で共同コミュニケ同時発表。中東和平へむけた国際会議を提案。

・イラク

で共同コミュニケ同時発表。中東和平へむけた国際会議を提案。

・トルコ

で共同コミュニケ同時発表。中東和平へむけた国際会議を提案。

ドルーズとシーア派、新治安計画に合意。ニコシアで開催する予定。

九月のイスラエルヨット襲撃闘争で裁判中の三人の戦士が、エスター・パルトル(せん滅)に「有罪」を認める。判事は、「有罪」承認の意味がよく理解されていないとして、三人が「無罪」を主張するよう(すべての罪状に關して)指示、休廷。

二月三日(火)

レバノン南部

ハスバヤで、PFLP—GCの前線基地をイスラエル攻撃部隊が急襲。GC側は、五名戦死、七名捕虜の敗北喫す。

西ベイルートのPSP—アマル停戦

「ミリシア合同警察勢力を六〇〇名で編成し、レバノン軍—IISFを支え、西ベイルートの治安維持に合意。

- リビアー＝エジプト緊張
- ムバラクは、リビアと事を構える意志なしと発表。
- シリアのバース党声明
　　「リビアへの攻撃を許さない」
- イスラエル
- 南部で軍事演習。
- 西岸
- ラマッラー市で、穩健派と目される弁護士アジズ・シェハダ暗殺された。彼は六八年時点で、「西岸にパレスチナ国家樹立」を提唱し、当時はPLOからも批判された。イスラエル－パレスチナ対話を主張する反面、イスラエルによる土地搾取訴訟問題に対し、精力的に取り組んでいた。
- シリア
- 国連演説で、中東和平解決の唯一の道は、独立パレスチナ建国にありと、強調。
- 二月四日（水）
 - 南レバノン
 - イスラエル軍、ベカ－南部の村々サイダ市近郊を砲撃。また、シェバア村へは長期の包囲攻撃中。人

- ・ レバノン政府
(イスラエル軍のレバノン村落蹂躪に対し、レバノン政府は、国連安保理に抗議。)
- ・ シリアーイラン共同声明
(カシム・シリア首相のイラン訪問終了)
- ・ レバノン統一へむけたシリアの役割評価、キャンプ・デービッド非難。
- ・ イスラエル
a シャミール、パキスタン、インドへの旅行に先立ち、マーフィと会談。シリアーヨルダンの歩み寄りに言及し、「これは、ヨルダンの対イスラエル直接交渉に、待ったをかけるため」
- ・ b 昨日、ラマッラアでおきた暗殺の容疑者逮捕さる。
- ・ c ラカーハ共産党、党大会開始ヘルツォグ大統領は、来賓招待受諾。右翼から共産党大会出席は不謹慎と非難さるも、「閣僚にはかつて決定した」とやり返す。
- ・ 西岸
ナブルス市近くのパレスチナキャンプ、AIN・アルベイタルマ、

- ・エジプト航空機乗っ取り事件
- ・マルタ政府が、犯人引き渡し要求拒否（根拠は、マルターエジプトを引き渡し条約がない）。裁判はマルタで行う予定。また、この闘争にリビアは無関係なりとも発表。
- ・三者合意
- ・カッダム第一副大統領「一〇月の三者合意は、反古になつてはいない。各々の意見交換中である」と発言。
- ・PFLPのハバシュ議長、リビア支持声明
　　〃リビア敵視策をとる帝国主義、イスラエルの陰謀を許さない〃
- ・ボラードスパイ事件
- ・米法務省、今週中に数名の調査係官チームをイスラエルに派遣する見込み。
- ・タバ問題
- ・エジプト－イスラエルで、交渉再開。
- ・米帝
 - 〃国家安全問題顧問のマクファーレン、ホワイトハウス参謀長のリガーンと意見合わず、辞任〃ワシントンポスト紙が、すっぱ抜く。

- ・ 西ベイルート
 - シリアルの停戦オブザーバー一〇〇人に増員（現在は四〇人）。
- ・ 西岸
 - ナブルス市の合法的市長シャカーリ氏（八二年、イスラエルが、勝手に「解任」）、マスリ任命を批判。「（敵の）言いなりになるような人がいるのは、心底無念だ。今回イスラエルの指令をうけた人々はパレスチナ人を代表していない」ナブルス市の人口は一三万人。これをナブルス商工会議所メンバー一〇人が、ナブルス市の市政を担当していく事になる。実業家のサエハ・カンナーンは、「（シヤカーリ市長後任に、イスラエル役人が任命されたのは違うから）PLOもパレスチナ人が市長になつたから、反対声明を出さなかつたのだ」と合理化。
 - 一方、PFLPは、マスリ任命非難。
 - ・ イスラエル一侧
 - ボラードスパイ事件に関連し、ボラードの妻も共犯として裁判開始（ニューヨーク）。

● イスラエル

一月二八日（木）

- 財政問題——ペレスは、「四〇五年ドルの予算カットは賛成だが、これ以上教育・保健予算の削減はできない。来年一年間、企業・国民が一致団結して緊縮財政を展開したら、八七年度から財政・経済がプラスへ転化するはず」と語る。
- イスラエル空軍、朝ベイルートを空を侵犯。ベカルにも偵察飛行。モロッコのハサン国王、訪仏開始。
- 「アラブ—イスラエル紛争調停を仏にやってほしい。仏のみがその力をもっている」と語る。
- P L O の動き
- ドバイのアル・バヤン紙によると、アンマンのパレスチナ筋の話では、近日中にパレスチナ勢力間の妥協・会合が始まる。P N S Fと愛國者は、P L Oリーダーとの対話に柔軟な姿勢を示している、とのこと。
- エジプト航空乗っ取り闘争
- バグダッドでのファタハ中央委員会後、アブ・イヤドを長とする新委員会が設置された。

- a エジプト政府は、生き残った戦士「オマル・マルズキ」の引き渡しを公式にマルタ政府に要求。
b マルタ側は、「オマル・マルズキの尋問を開始。在マルタチニニア大使館は「同人は（チニニア國民ではない」と断定。
c ムバラク、オランダの雑誌とのインタビューで、『中東和平を語るには、米はPLOぬきではやれないと主張。
- ヨルダンシリアへの旅行規制緩和を発表。
- エジプト航空乗っ取り事件（APECマルタの消息筋によると）
- a マルタ当局の捜査結果、機の炎上によるものではなく、エジプトの急襲部隊がやった。
- b マルタ首相は、コントロール・タワーから乗っ取り機攻撃を命令し叫び続けた。公式見解としては、対エジプト関係に変化なしでも、エジプト部隊のやり方に批判的な声が非公式には流れている。

- ベイルート
P S P — アマルの戦闘に抗議し、
スンニのデモ。
- イスラエル
ボラードスペイ事件で、ペレスが
米に正式謝罪。
- 一月三〇日（土）
- エジプト航空乗っ取り事件
a エジプトが一万五〇〇〇の兵力を
リビア国境に集結。この闘争の背
後にリビアありとして、恫喝。
- ニューヨーク・タイムズ紙
乗つ取り機襲撃には、米のデルタ
部隊も協力していた、とすっぱ抜
き。
- 二月一日（日）
- イスラエル
ベイルート上空侵犯。
- ボラードスペイ事件
シユルツが、ペレスの謝罪に満足
表明。
- 二月二日（月）
- イスラエル、南レバノン、スール
港封鎖一部解除。
- エジプト—リビア緊張
シリアは、リビアへカツダム派遣
リビアへの攻撃を許さぬ断固たる
立場を表明。一方、カシム首相一
行はイラン入り。
- マーフィ、サウジアラビアへ。

- レバノン
北部（トリポリ市と、近くのバダウイキヤンプ）にイスラエル艦が二度領海侵犯し、接近。レバノン左派、パレスチナ勢力、シリア軍が砲撃、追い返す。
 - 米帝
a マーフィ（イスラエル入り）
オマーン、ヨルダン、シリア、イラク、サウジを回って、サミット報告旅行。昨日は、ペレスと会談本日、シャミールと会談。「シリアヨルダンの立場に変化ないのでは、楽観できない」とシャミールに告ぐ。
 - シュルツの二一・二五書簡によれば、米帝の八六年度対イスラエル援助五億三一〇〇万ドル増加案反対。同案は、米議員有志がレーガンにあて、出したもの（ロイター）。
 - エジプト機乗^{マサニ}取^{マサニ}り作戦
カリド・アル・ハサン（アラファト政治顧問）は、同作戦をアブ・ニダールの仕業、精神的に不安定な連中を半年も隔離して、憎悪を叩きこみ、操ったと、非難。アキレ・ラウロ号作戦指導者と目されるアブル・アッバース（PLOを率いる）、「テロリズム一般には反対。対イスラエル戦は、神

聖な戦争なのだ。アラファートの力
イロ宣言は、無関係の人々をひき
すりこまないという原則を述べた
もの」と、アラファート支持発言。

また、国連でのアラブ連盟主催食会で、カドゥミPLO政治局長は、米の反PLO・親イスラエル

宣言を非難—チニスでは、イスラエルは爆撃により一〇〇人以上
のパレスチナ人を殺した。しかし、米国市民が一人殺されて初めて、米はテロリズムを云々する」

安倍外相、アラブ連盟一七名の大使、PLO代表を招いて昼食会。近來の対中東政策を強調、「アラブ

「アーヴィングの文書で東政策を強調し、ラブ寄り」の姿勢をみせる。

タバ問題
国際会議で、タバ問題を解決していく方向に、イスラエルーエジプトは、基本的に合意。
米人捕虜釈放問題
クウェート政府、ウェイトの入国拒否。

ヨルダン 八六年度予算採択。
総額二五億ドル

国庫歳入見込み一四億ドル
うち外国からの援助見込み六億五〇〇万ドル（主にアラブ諸国）
ら。前年度比三〇%増）

国防費（国内治安維持含む）約六〇〇〇万ドル（前年度比一八四%増）

八五年度G.N.P伸び率五%（八四年度G.N.P総額四八億ドル）
石油輸入年間六億ドル（サウジアラビアから全部輸入）

・西岸でイスラエル軍兵舎攻撃
戦。イスラエル軍も、火災による
八名焼死、負傷者ありと発表。
• G C C — E C 石化製品市場
a サウジ製メタノール・エチレン、
グリコールの対 E C 無関税輸出が
大幅に緩和。

ポリエチレンの対EC輸出枠を三・四%から一四%に上げたためG C C - E C 関係冷却していたが、一〇月にルクセンブルグでG C C - E C 会議（両経済圏の貿易問題をめぐり、高官レベル）あったが、八六年度一月にリヤドで会議継続

● イラン 発表さる。

「OPECメンバー一国がOPEC価格（バーレル二八ドル）破りをしている。インフレが跋扈しているのに価格を下げる事はできない」

・ポラードスパイ事件
シユルツ「来週早々に、法務省から調査団を派遣する」（調査団に

は、シャロン対タイム誌訴訟事件の判事も含まれる予定)。

和平を求める過程で、力になる“だろう。パレスチナ人の代表は誰がするのか、和平会議の主催者問題など、まだ未解決の点がある。米国の中東和平達成戦略は確定されたが、細かい戦術上、未解決の課題が残っている」と語る（数日前、ヨルダン高官が、米の中東政策無策に失望したと批判している）。

